「楽譜の裏側に隠されたもの」に迫ろう

ー民謡を取り入れたピアノ独奏曲を例にー

Suzuki Keishi
鈴木 啓資
奈良教育大学 音楽教育講座

「楽譜の裏側に隠されたもの」に迫ろう

－民謡を取り入れたピアノ独奏曲を例に－

奈良教育大学　音楽教育講座　鈴木 啓資

※ハンガリー語では人名を日本語と同様に姓名の順で表記しますが、今回は欧文表記にならって、名姓の順で表記しています。

１．はじめに

私は現在、ピアニスト、指揮者として演奏活動をするとともに、ハンガリーに留学した経験を活かして、主にハンガリーの音楽やピアノ教育について研究しています。研究をしていて思うことは、楽曲をただ演奏するだけでなく、様々な方向からのアプローチがとても大切であるということです。今回は、ピアノ独奏曲を題材とし、楽譜には書かれていないことから演奏について考えてみます。

みなさんは「ピアノ独奏曲」というと、どのような曲を思い浮かべるでしょうか。ピアノ・ソナタを思い浮かべる人もいれば、バッハに代表される多声音楽を思い浮かべる人など、様々だと思います。場合によっては、オーケストラ用の楽曲をピアノ1台で弾けるようにした編曲作品を思い浮かべる人もいるかもしれないですね。このように一言で「ピアノ独奏曲」と言っても、様々なジャンルがあります。

今回は、私が研究しているハンガリー音楽の中でも、民謡を取り入れたピアノ独奏曲に焦点を当て、そのような楽曲をどのように弾いていくのかを考えるとともに、その楽曲の根本に迫っていきたいと思います。

さて、民謡を取り入れているということは、その前段階として民謡を収集しているということになりますね。そこで、まずはハンガリーにおける民謡収集の歴史について簡単に見ていきましょう。

２．ハンガリーにおける民謡収集

ハンガリーにおいて民謡（民俗音楽）の収集が始められたのは1782年のことであり、この年の新聞誌上において古い歌を収集、投稿するように呼びかけられたことであるとされています。しかし、この時代の収集では実地調査は行われず、身近な人が歌っている旋律を書き留めたり、地方に住んでいる知人に書き送るように頼んだりしていた程度でした。19世紀になってもこの状況は変わりませんでしたが、1877年にトーマス・エディソン Thomas Edison（1847-1931）によって蝋管式蓄音機（フォノグラフ）が発明されたことが、民俗音楽研究に大きな影響を与えました。それまで口頭伝承が基本であった民俗音楽を、記録して残せるようになったのです。

この蓄音機を用いて本格的に民謡収集を行った人物として、ベーラ・ヴィカール　Béla Vikár（1859-1945）を挙げられます。彼は言語学者であったため、音楽よりも歌詞に着目をしていましたが、発明されたばかりの蓄音機を用いて、民謡などの収集を行いました。彼の後を追って民俗音楽研究を行ったのが、作曲家として活躍したベーラ・バルトーク　Béla Bartók（1881-1945）とゾルターン・コダーイ　Kodály Zoltán（1882-1967）です。彼らは『ハンガリー民謡大観 A Magyar Népzene Tára』や『ハンガリーの民俗音楽 A Magyar Népzene』といった文献を残し、ハンガリーにおける民俗音楽研究の基礎を作り上げました。このように、民謡の収集は1800年代後半になってから、より活発になったと言えるでしょう。

３．民謡を用いた音楽について

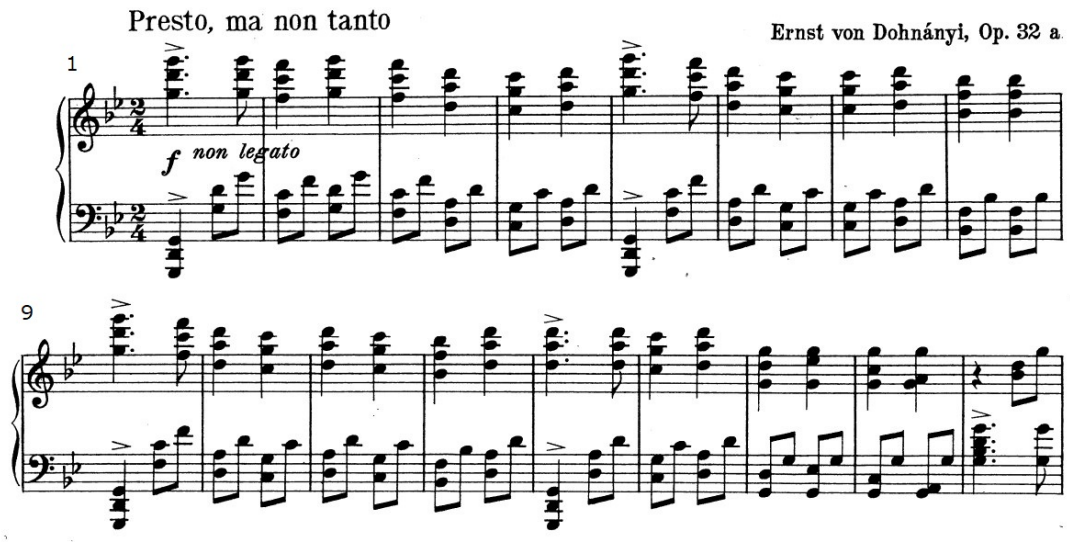
ここからは民謡を用いた音楽について考えてみます。今回はハンガリーの音楽家、エルネー・ドホナーニ　Ernő Dohnányi（1877-1960）がハンガリー民謡を用いて作った、《ハンガリー牧歌 Ruralia Hungarica》Op.32aを題材とし、その演奏法について出版された楽譜と用いられた元の民謡から考えていきましょう。この楽曲は民謡の旋律がそのまま活かされており、比較的わかりやすい楽曲となっています。なお、《ハンガリー牧歌》は全7曲からなる曲ですが、今回は4つの民謡が用いられている

第2曲を取り上げます。

３－１．《ハンガリー牧歌》第２曲１番目に現れる民謡

まずは、第2曲において最初に現れる民謡について考えてみます。曲の冒頭を見てみましょう（譜例1）。

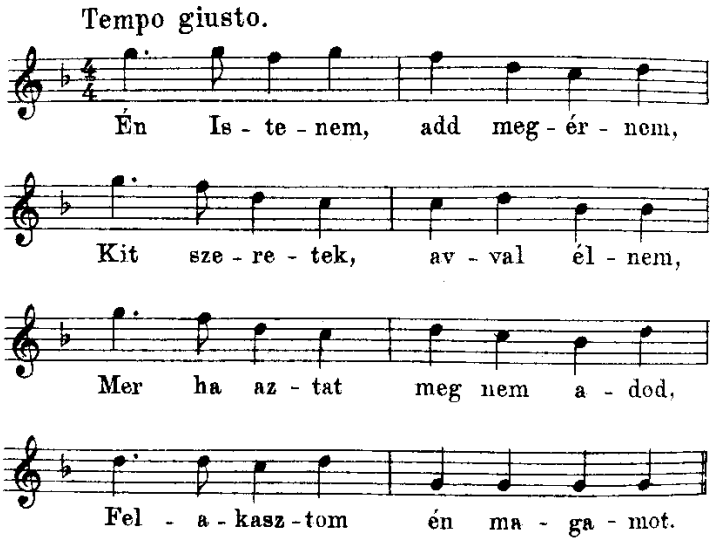
譜例１　《ハンガリー牧歌》第2曲　第1～17小節
（小節番号は筆者が追加）



この楽譜を見たときに、どのように演奏しようと考えるでしょうか。音を鳴らしてみるとわかりますが、明るいような暗いような、なんとも言えない響きに気づくと思います。東洋的であるとも言えるでしょう。その一方で、音量は f、冒頭には Presto, ma non tanto、つまり、「快速に、あまり速すぎず」と書いてあり、さらには non legato の表記もありますから、勢いのある楽曲であることがわかるでしょう。そしてハンガリーの舞曲調の雰囲気もあります。

様々なことが楽譜に書かれており、どのように演奏したら良いのか悩んでしまいますね。もちろんこれらの情報だけでも演奏できますが、ここではさらに踏み込んで、用いられている民謡について考えてみたいと思います。この部分には以下の民謡が用いられています（譜例 2）。

譜例２　Erdélyi　magyarság: népdalok　p.126より



この民謡の旋律が、譜例1の第1〜16小節にそのまま使われていることに気づいていただけるのではないかと思います。歌詞は3番までありますが、ここでは1番の歌詞に着目してみましょう。

原語	和訳
Én Istenem, add megérnem,	私の神さま、お願いです
Kit szeretek, avval élnem.	私は愛する人と生きたい
Mer ha aztat meg nem adod,	愛する人を与えてくださらないのなら
Felakasztom én magamot.	私は首を吊る　（パップ晶子　訳）

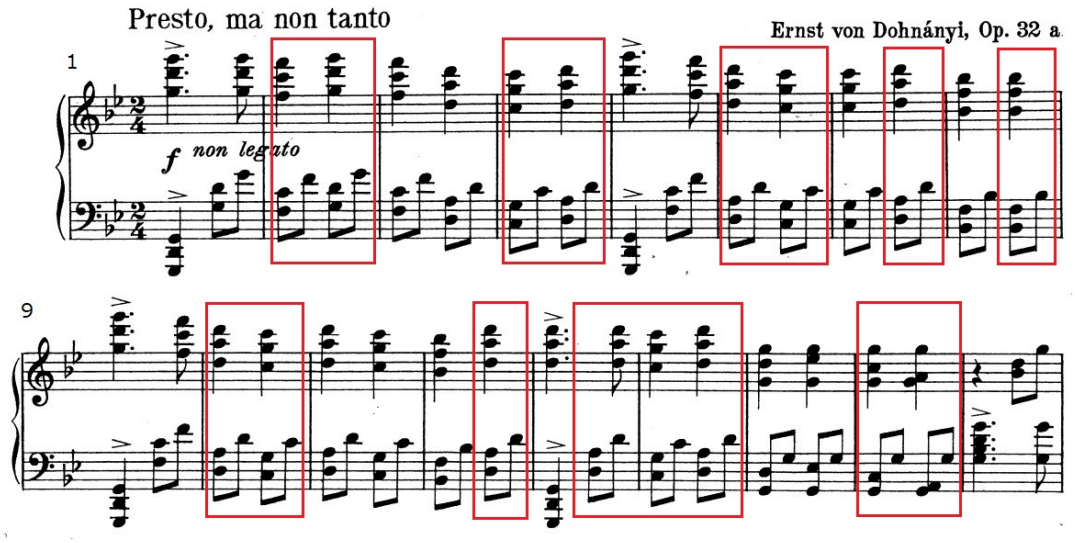
いかがでしょうか。この部分には、「愛する人と生きていけないのであれば私は首を吊る」という、かなり衝撃的な内容の民謡が用いられているのです。このことを考えると、きっとこの曲を軽く弾こうという気にはならないのではないでしょうか。これこそが楽譜には書かれておらず、原曲の民謡を知ってこそ初めて理解できることなのです。

なお、ドホナーニは民謡を用いて作曲する際に、原曲を尊重していましたので、この歌詞を分かったうえで用いているはずです。この《ハンガリー牧歌》第2曲に用いられたすべての民謡が失恋関係のものであることからも、ドホナーニが歌詞を知らずに適当に選んだ民謡を用いたとは言え

ないでしょう。

次にハンガリー語の特徴からも少し考えてみたいと思います。ハンガリー語はあまり馴染みがない言語かもしれませんが、名前を「姓・名」の順で書くなど、日本語と似たところもあります。そのようなハンガリー語の特徴の１つが、アクセントが常に単語の頭に置かれるということです。そのことを考慮した上で、《ハンガリー牧歌》第２曲の冒頭を再度見てみましょう。

譜例3



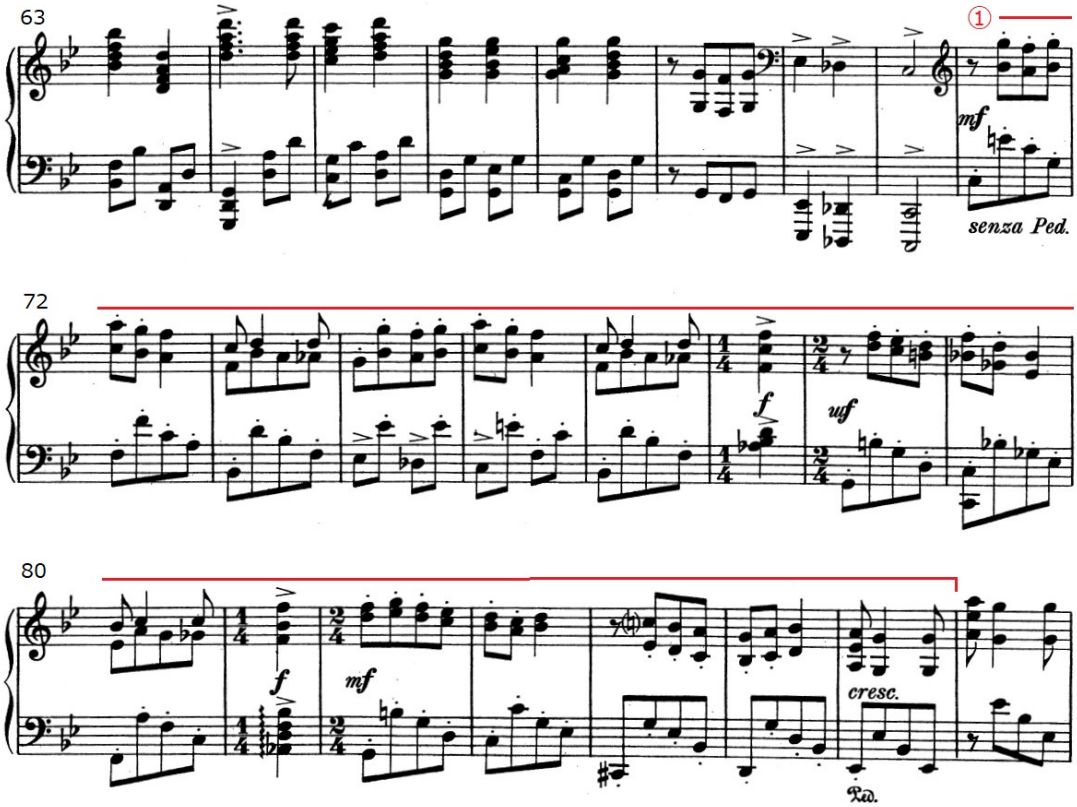
譜例3では民謡の歌詞を考慮し、アクセントが来ない場所、すなわち単語の冒頭が来ない箇所を赤い四角で示しています。ドホナーニは4小節に1回アクセントを書いていることから、4小節を1つに捉えて演奏することが大切ですが、そのフレーズの中でも赤い四角の部分にはアクセントが来ないように気をつけると良いでしょう。なお、アクセントが来ないということが、強く弾かないということではありませんので注意が必要です。

３－２．《ハンガリー牧歌》第２曲３番目に現れる民謡

次に、第2曲において3番目に現れる民謡について考えてみましょう。

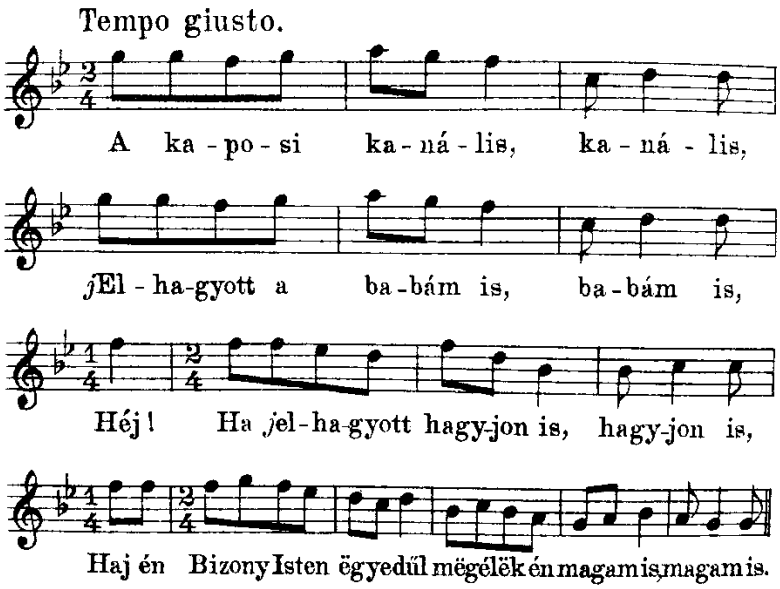
譜例4の①で示した部分の旋律に民謡が用いられています。

譜例4　《ハンガリー牧歌》第2曲　第63～87小節
（筆者が小節番号を追加）



この部分の特徴は、4分の2拍子である楽曲に4分の1拍子が挿入されているという点です。2拍と1拍をくっつけて、部分的に4分の3拍子とすることもできたはずですが、なぜ4分の1拍子なのでしょうか。そのヒントは用いられた民謡にあります（譜例5）。

譜例5　Erdélyi　magyarság: népdalok　p.124より



ドホナーニは原曲の民謡をそのまま活かすということを前述しましたが、ここでもその傾向は見られます。先ほどの4分の1拍子はドホナーニによるものではなく、もともとの民謡によるものだったのです。

しかし、ドホナーニの楽曲（譜例4）にはあって、元の民謡（譜例5）にはないものがあります。それは、4分の1拍子になっている部分につけられたアクセントです。このアクセントがなぜつけられたのでしょうか。ここで、用いられた民謡の歌詞に注目してみます。

原語	和訳
A kaposi kanális, kanális,	カポシュの運河、運河
JElhagyott a babám is, babám is,	恋人も、恋人も、私の元を去った
Héj! Ha jelhagyott hagyjon is, hagyjon is,	ヘィ！去って行ったが、去るなら去れ
Haj én Bizony Isten ëgyedűl mëgélëk én magam is, magam is.	ヘィ、私は神に誓って、自分一人で生きていく、自分一人で生きていく

（パップ晶子　訳）

歌詞、元の民謡、ドホナーニの楽曲を見比べていくと、4分の1拍子の部分は「ヘィ！」という掛け声の部分であることがわかります。ドホナーニはこの掛け声の部分をfかつアクセントとし、それ以外の部分をmfとしていますが、これは掛け声の要素を強調するためであったと考えることができるでしょう。そのため、この4分の1拍子の部分は、重さのあるアクセントではなく、音を遠くに飛ばすような勢いのあるアクセントの表現がふさわしいと考えられます。また、歌詞の内容から失恋して吹っ切れている様子がわかりますから、全体的に勢いがあり、思い切った表現が良いのではないでしょうか。

４．おわりに

本稿では、ドホナーニの《ハンガリー牧歌》op.32aの第2曲について、民謡の歌詞という視点から表現について簡単に考えてみました。用いられている民謡の歌詞や言葉の特徴がわかってくると、音楽の見方が変わってくると思います。もちろん楽譜を見てわかることを活かすということも大切ですが、より深い演奏をしようと思うと、原曲の歌詞という深いところまで考える必要があります。

今回は民謡が用いられた楽曲に焦点を当てましたが、その他の音楽でも似たようなことが言えると思います。作曲されたときの社会的な出来事や作曲家の周りに起こった出来事、心情などの作曲背景を知ると、より一層興味がわくのではないでしょうか。楽譜と向き合って長時間練習することはもちろん大切ですが、このような楽譜には書かれていないことを知ると、より深い演奏表現につながってくると思います。ぜひ、「楽譜の裏側に隠されたもの」に迫ってみてください。

＜参考文献・使用楽譜＞

バーリント，シャーロシ（Bálint, Sárosi）
1994 『ハンガリーの音楽 ： その伝統と語法』横井雅子 訳（東京：音楽之友社）[Zenei anyanyelvünk, (Budapest: Gondolat, 1975)]

Dohnányi, Ernő
1925 Ruralia Hungarica Op.32a (Budapest: Rózsavölgyi)

Grymes, James A
2001 Ernst von Dohnányi: A Bio Bibliography.
(Westport, Connecticut: Greenwood Press)
2005 Perspectives on Ernst von Dohnányi. (Lanham：Scarecrow Press)

Kodály, Zoltán a.o.
1923 Erdélyi magyarság: népdalok (Budapest: Rózsavölgyi)

鈴木啓資
2020 「民謡を取り入れた音楽による表現―Ernő Dohnányi の民謡に対する姿勢に基づく考察」『2019 年度東京音楽大学大学院博士後期課程博士共同研究 B 報告書』（東京：東京音楽大学） 18-30.

鈴木　啓資（ Keishi SUZUKI ）

2021 年　東京音楽大学大学院 音楽研究科音楽専攻
　　博士後期 課程修了（音楽博士）
2018 年　甲斐清和高等学校音楽科 ピアノ非常勤講師
2020 年　埼玉県立松伏高等学校音楽科 ピアノ非常勤講師
2022 年　奈良教育大学 音楽教育講座 准教授

【研究テーマ】
ドホナーニ・エルネーの直系の流れを汲む研究者として、ドホナーニを中心としたハンガリーの音楽、ピアノ教育について研究しています。ピアノ独奏や室内楽（アンサンブル）の奏者としてだけでなく、指揮者としても活動しながら、多方面からピアノという楽器に対してアプローチをしており、その大切さを日々感じています。

【趣　　味】
自然の中で過ごすこと、旅行、ドライブ、釣り、囲碁など。

【休日の過ごし方】
疲れているときはとにかく休みます。ただ、性格的に家でのんびりするよりはアクティブに動き回りたいタイプなので、結局１日中家にいるという日はあまりありません。

【今の研究分野を選択したきっかけ】
幼い頃から音楽教室に通っていたのですが、高校に入学した頃にもっと本格的にピアノを勉強したくなりました。その後、かなり悩んで音大進学を決めました。ドホナーニの音楽に出会ったのはハンガリー留学中ですが、私の先生がドホナーニの孫弟子であり、「ドホナーニの部屋」という部屋でレッスンをしていただいていたことから興味をもちました。ドホナーニの楽曲を初めて聴いたときには、そのロマンあふれる音楽に魅了されたことを鮮明に記憶しています。

「楽譜の裏側に隠されたもの」に迫ろう
－民謡を取り入れたピアノ独奏曲を例に－

著者　鈴木（すずき）　啓資（けいし）
2023年 3月31日 第1版
奈良教育大学出版会
〒630-8528
奈良市高畑町
TEL: 0742 (27) 9343　FAX: 0742 (27) 9147
E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp
URL: https://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/